琉球大学学術リポジトリ

パイン心腐病の防除

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 俊一, Shimabukuro, Shunichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20891

パイン心腐病の防除

1 発病地域

本病はハワイ、台湾において、比較的古くから存在が知られていた。八重山においては、1959年に、元名蔵の池間松夫さんの畑に発生したのが最初で、その苗は本部町伊豆味から入れたものだと云う。石垣島や西表島は、程度の差はあるが殆んど毎年発生をくりかえしている。

沖縄本島においても、わずかながら発生する。側えば羽地村伊佐川の農連パイン工場構内に植付けのハワイ導入種に、また具志川村昆布にも発生した。最近における大発生は、1962年石垣島のそれで、2月5日、6日の調査によると、石垣市の被害面積は2，778アール、大浜町は1，220アールとなっている。ここに云う被害面積とは、発病面積でなく、発病せる圃場の面積で、一圃場に一ケ所発生せる場合は、その圃場全体の面積を算入したとのことである。

2 病　徴

被病株の病徴は、多少の差があるが、一致する点はつぎの通りである。

a．苗もしくは幼株の心葉の数枚が、束になつて容易に抜きとることができる（**写真AとB**）

b．健全部と病部の境に、濃褐色波状の横線がある。（**写真C**）

c．病株の心部先端は、腐敗軟化して淡黄色チーズ状を呈し一種の悪臭がある。堆肥よりさらにくさい。

d．細根の死んでいるのが多い。

3 病原菌

患部から種々の細菌やキン類が検出されるが、本病の主因をなすのは、つぎの二種のカビ類である。

- ●ヒトプトラ・シンナモミー
- ●ヒトプトラ・パラシィカー

湿って、停滞水の多い畑に発病する場合は、主に前者のカビであり、乾燥地でいくらかアルカリ度の高い畑は、後者のようである。

何れも多犯性のカビきんでその寄種植物は100種以上知られている。

前者は、外国では現在アボカド（熱帯果樹）の被害きんとして重視されている。後者は、ナスの綿病、ヘチマ疫病きんとして普通である。

4 防除法

a．除草した雑草は隣りの健全株の列上にのせないこと。土壌と共に病きんを伝播するおそれがある。

b．排水のため、圃場内に排水溝を設け、できるだけ停滞水をつくらないようにする。八重山の新設圃場においてはよく実行されている。（**写真E**）

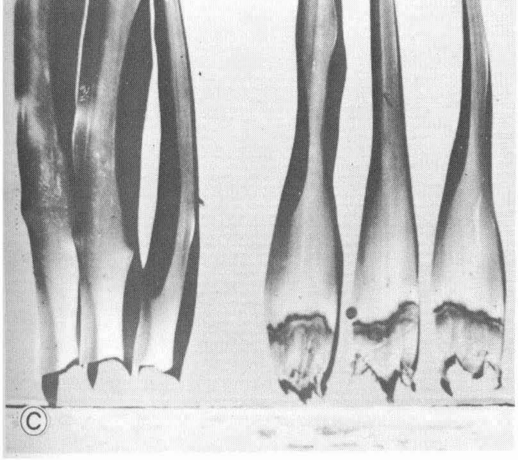
c．健全苗を選び、その取扱いをていねいにして傷を与えないこと。傷部から病原きんが侵入しやすい。

d．パインコナカイガラムシ駆除のためにパラチオンに浸漬するのは合理的であるが、幼葉基部の白い部分に傷をうけやすいので特に注意が必要である。

d．小面積に発病の場合は、クロールピクリンの使用もよいが、高価のため不経済である。

e．八重山における農薬防除試験の結果。

キヤプタン（50%水和剤）の0，5%液、マンゼート（90%水和剤）の0，5%液の何れかを、10月下旬～11月上旬頃から、10日おきに、三回散布すれば、ほぼ完全に防除することができる。オーソサイドの水和剤もよいが、50%水和剤を使用するのがよい。何れも沖縄の農薬販売店にある。　　　**（島袋俊一）**



A　手にしているのは病株。抜いた心葉は右手の前方に見える。

B　右は健全株。左は病株の縦断で、心部を抜いたあとに褐色の横線が見える。

C　左は健全葉、右は被病葉で、健全部との境に褐色の横線がある。

D　心腐病の発生で欠株を生じた圃場

E　縦横に設けられた排水溝